

満員列車にゆられていました。半世紀も以前のことです。

懐かしのわが家へ帰り着くと、家族全員元気で迎えてくれて大安心でした。父の宮々と築いてくれた農業の財産を私はしっかりと受け継ぎ守って、一筋に励み貫き現在に至りました。

現在の私の家族は妻と一男二女。孫は全部で四人。皆元気で自分自分の道を進み、分を辨えて家庭円満、不都合はせず、金銭の苦勞もなく、平凡で幸福な状態に恵まれ、感謝の毎日です。

支那事変

野戦重砲兵の初陣

神奈川県 片岡 幸雄

私の父は警視庁勤務、母は学校教員という家庭の次男として生まれ、横須賀中学校卒業後、日産自動車に勤務していました。

昭和十一年一月、現役兵として三島野戦重砲連隊第六中隊に入隊しました。当時、特科連隊では現役二年の服役でした。初年兵服務期間で特に思い出すことは馬でした。都会に育った私は馬に触れたこともありませんでした。馬の脚を持ち上げて蹄の裏の溝の中の汚物を奇麗に洗って蹄油を塗布してやらねばなりません。それが朝と夕の二回、毎日の日課です。怖さで息が止まりそうでした。また厩舎の寝葉は朝、舎外に運び出して乾燥させて、夕方また運び入れて、馬の寢床を作る作業の繰り返しです。

一期の検閲直後、幹部候補生の採用試験を受けましたが、検査場に入るドアの開け方が悪かっただけで失格し採用されず、一般兵として現役を勤務しました。

現役服務中、支那事変が勃発し、動員令が下り、補充隊勤務として引き続き服役し、昭和十二年十二月上等兵に進級し初年兵教育をやりました。

昭和十四年三月に宇品港を出航し、上海に上陸後南京を経由し漢口に到着、野戦重砲第十一連隊第二中隊に編入されました。

この連隊は予備役、後備役の兵で編成された部隊で、古兵さん部隊です。私は上等兵で三年兵でありましたが、最も若い方で初年兵に逆戻り、飯炊き、水汲み、馬の手入れ、砲の手入れ、一切の雑役は私ども若い兵の受け持ちで、全く休む暇もなく働き続けました。

三月二十五日、雁門口付近の討伐・警備中の連隊は襄東作戦を開始し、我々野戦重砲連隊にもこの作戦に参加が下命されました。

襄東作戦は敵第三一集團軍（司令官湯恩伯）が襄陽（信陽西方二百キロ）付近に集結し進撃を企図しつつあるとの情報に基づき、中支派遣軍第十一軍が敵の企図を粉碎し、これを捕捉殲滅を期した作戦であります。野戦重砲連隊はこの作戦の主力師団の側面援護の目的のため、漢水に沿って六個中隊、中隊間隔十二キロの長間隔に展開し任務につきました。

この長い間隔の配備の隙をついて、対岸の敵は夜間渡河進入し、毎夜のように襲撃を敢行してきました。敵は我々重砲部隊が近接戦闘火力の弱いことを知っての上の夜襲です。砲兵部隊の装備は砲以外は小銃も携

行していません。やむを得ず鹵獲小銃で応戦しましたが、これとて使用弾薬の補給が続かないので敵が間近に近接したときに発射するように使いました。

ある夜は敵の襲撃部隊は五千人もの大部隊に増え、野重部隊もやむを得ず零距离射撃を行って、この敵襲を阻止することができました。

零距离射撃とは、榴散弾を使用し、信管を砲弾が砲口を出た瞬間に爆発させるという砲兵部隊が近接戦闘に自衛のため行う非常手段的な射撃方法です。この一五センチ榴弾砲の射撃は、発射の瞬間、天地も裂けたかと思うほどの凄まじい爆発です。爆発後は暫時、彼我共に「シュン」として全ての物音も絶え、現世の終わりの様相を呈する凄まじさです。翌朝砲の前面には数十名の敵の遺棄死体が粉碎状態で転がっていました。野戦重砲一門に対する携行弾は、何分にも重いので二〇発くらいです。敵襲の都度、零距离射撃で敵を撃退するわけにはまいりません。

毎夜の敵襲に中隊長は、対岸の敵の拠点と考えられる部落を攻撃する計画を練り、決死隊を編成し、対岸

に渡河し部落へ突入しました。私もこの部隊に編入されました。しかしこの攻撃のため部落へ突入しましたが、敵は蛻はらの殻、一人もいません。農家の百姓が農業に忙しそうに働いている、のんびりした静かな部落の昼時の風景でした。一同ホッとすると同時にガッカリした攻撃隊でした。

この時期、野重連隊本部も敵の襲撃を受けました。本部は我々中隊よりさらに自衛装備は少なく弱く、連隊長も兵服に着替え、壕の中に潜んで難を避けられました。

我々野戦重砲の砲は三八式一五センチ榴散弾でしたが、原隊では四年式一五センチ榴弾砲という古い型なのに驚いた次第です。砲に防楯もないしろものです。防備の点では甚だ劣っています。日露戦争後、軍の火力強化で急増された三八式一五榴が沢山作られ在庫していたので、この砲が中支戦線に送られたものです。

私は二番砲手で、方向照準が任務。一番砲手が高低照準担当、両者協力して観測班から指示された射撃諸元に基づいて砲を操作して発射するのです。一五榴は

輓馬編成で馭者は乗馬であるが砲手の行軍は徒歩です。一五センチ榴弾砲の特徴は、口径が一五センチもあって圧倒的な巨弾を敵に浴びせることの外、その弾道が弧を画いて飛ぶので、山頂を越え、その後方の目標に射弾を合わせることができる利点がある砲でした。有効射程三千メートルです。

昭和十四年五月、作戦終了とともに復員命令が出て夢かと喜びましたが、漢口まで徒歩で行軍せねばなりませんでした。二五〇キロもの距離を六日も歩き、ほとんど不眠不休で歩きました。夜間は眠りながら歩きました。漢口郊外に復員船を待つ間、馬部隊は一時も馬の世話を放置するわけにはまいりません。兵舎と厩舎の間にはかなり大きなクリークで隔てられています。橋がかなり対岸より離れていましたので、通行する物売りの小船に頼んだり、嚇したりして川を渡してもらって、馬の手入れに通いました。

昭和十四年七月、召集解除により懐かしい自宅に帰ることができました。

復員後、元の職場である日産自動車勤労課に勤務し

ていましたが、昭和十七年新聞紙上で、海軍軍属募集の広告を見てそれに応募しました。一次試験は横浜の県庁で、さらに二次試験は海軍省で受験し、合格しました。

赴任先はセレベス島マカッサル市所在の南西方面艦隊海軍民生府に定まり、「鎌倉丸」に乗船、任地に赴任しました。

この機関は当時の大東亜大臣の掌握下の民生府総官の所屬で、ボルネオ、小スンダ、マカッサルの三民生部長官があり、私はその一つ、マカッサル民生部に赴任することとなりました。待遇は判任文官（准士官）、軍属であったので恩給関係からは除外されました（軍属は高等官のみが恩給対象者として取扱われたようです）。

民生部は長官のもと現地における道路開発、衛生関係、農林水産の軍需、石油開発等が任務で、私は廳内庶務関係書記として勤務しました。給料は本俸は内地の留守家族に支給され、私は加俸（六十五円くらい）を現地で支給されていました。住居は元オランダ人家

屋を接收した蕭洒な洋館で、これに二三人で暮らすことができました。

そのうち、ジャワ島スラバヤ市に転勤。さらに同島バタビヤに転勤後終戦を迎えました。

終戦後、私は庶務でしたので役所の財産を連合軍に移譲する役を受け、待機しているとき、移譲対象のイギリス軍が上陸しましたが、現地人の独立運動が激しくなり、これに妨害されて移譲することができず、スラバヤに復帰しました。このころ抑留していたオランダ人たちが復帰してきて私の乗用していた車も彼らに没収されてしまいました。

私たちはマランに集結を命ぜられました。ここでは畑の中の竹造りの小屋にニツパ椰子の葉で屋根を覆った小屋住まいと変転し、畑は食糧栽培で自給を計り、山羊を飼い乳を搾りました。私は山羊係として働きましたが、山羊係は運動と称して街へ出向き、現地人より必需品を買入れて自活を助けました。

捕虜としてシンガポール北レンパン島（無人島）に收容され、英軍監視下に道路作業などに従事させられ

ました。ここでは食糧の不足に困りました。一応缶詰などの配給はありましたが、量が全然不足しています。缶詰の内容は煙草などもあり、なかなか良く整っていますがわずかな配給では致し方ありません。我々が以前に復員した人たちが帰還の際に密かに残置してくれた食糧を夜間ジャングルより隠密に取り出して飢えをしのいだり、木の新芽などを摘んだりして生命を保持し続けました。

こうした耐乏生活の中で突如、救いの復員船米軍のリバティー船がきました。リバティー船の舷側に吊るされた縄梯子に一回我先にと飛び付きました。私は少々遅れて重いリュックサックを背負い縄梯子に飛び付きました。リバティー船の舷側は目が回るほど高く、十数メートルはあるのでしよう。それに一面に縄梯子が架かっています。なかなか上れません。辺りを眺めると私が最後尾になっています。驚いて頑張って上ろうとしますが、力を入れた足の縄梯子がスートと前に出て体を上上げてくれません。縄梯子は沢山の人のための重量で梯子の役をなしている物だ、下の方に重さが

ない場合は梯子の役割を果たさないものだと思いきました。と同時にどうしようと焦れば焦るほど、足を踏ん張れば踏ん張るほど、足が梯子と共に前に出るばかり、体は一つも上に上れないのです。手を離せば下のボートの固い甲板の上に落下、生命はありません。冷や汗がドーンと出ます。

ここまでいろいろ苦勞に耐えて、ここで最後かと覚悟を定めたとき、甲板の上から救命ロープが下ろされ、背負ったリュックサックの一端に結びつけ、引き揚げられてやっと甲板に上がることができました。最後の最後まで命懸けの私の戦務でした。

懲罰大隊記

神奈川県 牛窪 剛

私は大正十四年八月、現在の海老名市、昔の有馬村で生まれました。そして吉祥寺というお寺で育ちました。長兄が住職をしていましたので、小学校六年卒業